

2017年度 聖学院大学総合研究所 ラインホルド・ニーバー研究会 主催  
第2回ラインホルド・ニーバー研究会

五十嵐成見助教による『知的自伝』(Intellectual Autobiography) から見る  
ニーバー神学の特質」報告



発題者：五十嵐成見先生（上段左）  
開会挨拶：高橋義文研究代表（上段右）

2017年12月4日（月）、聖学院本部新館集會室にて、2017年度第2回ラインホルド・ニーバー研究会が開催され、五十嵐成見氏（聖学院大学人間福祉学部チャプレン・助教、日本基督教団花小金井教会牧師）によって、『知的自伝』(Intellectual Autobiography) から見るニーバー神学の特質」というテーマで発題がなされた。

『知的自伝』は、ニーバーへの献呈論文集 Charles W. Kegley and Robert W. Bretall, eds., *Reinhold Niebuhr: His Religious, Social, and Political Thought* (New York: Macmillan Company, 1956) の冒頭に置かれたものであるが、主としてこの自伝的文章に基づいての、また、当時の歴史的・社会的・思想的背景をふまえつつの報告であった。

本発題は、『知的自伝』の内容について、I「キリスト教弁証学者」としての自己、II 思想的影響を受けた人物および牧師までの経緯、III ベテル福音教会時代、IV ユニオン神学大学院教員時代、V 目指すべきキリスト教弁証学、という区切りを暫定的に設け、ニーバーに影響を与えた人物、罪と

死の問題、人間観、人間の自由、キリスト教とデモクラシー、「意味」の枠組み、信仰と経験の連関関係、ニーバーの弁証学の特徴など多岐にわたるテーマを設定しての検討を試みたものである。

発題において、ニーバーの思想形成と神学に関して強制的に述べられたことを挙げるならば、①父グスタフ、サミュエル・プレス、マッキントッシュ、アウグスティヌスなどから多大な影響を受けたこと、②ニーバーは牧会経験を通して死と罪との関連を感得したこと、③その神学は、悲観主義や敗北主義の要素は強くありながらも、歴史形成的側面を有し、また、次第に恩寵論を重視するようになったこと、④人間存在の複雑な構造は、「ドラマ的-歴史的」によって把握されうること、⑤デモクラシーは、人間の美德や理性というよりは「一種の恩寵」によってもたらされること、⑥現実の深みにあり、また現実を超越する「意味の枠組」(「意味領域」)があり、それは、「神話・象徴」によって表現されること、⑦信仰と経験との関係は、単なる逆説ではなく、恩寵や聖化と関連する積極的なものであること、⑧ニーバーの弁証学は、福音の果実としての「謙遜のセンス」を求める預言者的弁証学であること、などである。また、今後の課題として、ニーバーのいう「プラグマティック・パシフィズム」の内容についての吟味、かれにおける「存在論的アプローチ」や「歴史に行為する神」などについての理解を深めることなどが挙げられた。

発題をめぐっての質疑応答においては、ニーバーの思想形成史や、その著作との具体的関連などをめぐって活発な発言と討議がなされ、たいへん有意義な研究会となった。

(文責：柳田洋夫 [やなぎだ・ひろお] 聖学院大学人文学部チャプレン・日本文化学科准教授)